

熊本県南関町（国内5例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和3年12月3日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境等

- ① 当該農場は、小高い丘陵の上部に位置し、周囲は竹林とスギ・ヒノキ林に囲まれている。周囲の200mから300mには人家、畑、水田が存在するが、水田は耕起され乾燥しており、カモ類の採食には適さないと考えられた。農場から約300mに位置する幅約3mの水路の周囲には水田があり、耕起がされていないものもあったが二番穂はなかった。
- ② 当該農場は肉用鶏を平飼いしており、敷地内には、開放鶏舎11棟、事務所、倉庫2棟があり、離れた場所に系列農場と共用の堆肥舎があった。なお、鶏舎は狭小な公道（農道）を挟んで、5棟と6棟に分かれており、発生鶏舎は5棟のうち公道側から2番目に位置していた。
- ③ 農場周囲3km以内には4か所のため池と河川が認められた。約1km離れた最も近いため池にはカモ類の生息は認められなかった。約2.2kmに位置するため池にはカモ類（オシドリ5羽、コガモ3羽）が、1.8km離れた河川にはコガモ6羽が確認された。カモ類以外の鳥も、ヒヨドリ、ハシブトガラス、ドバト、セグロセキレイ、イソシギのみであり、全体的に数は少なかった。

2 通報までの経緯

- ① 飼養管理者によると、12月1日、2日と発生鶏舎における死亡鶏の増加が確認されたため、2日に管理獣医師が簡易検査を実施したところ陽性となり、家畜保健衛生所に通報したとのこと。死亡鶏の増加以外には特段の症状や兆候はなかったとのこと。

3 飼養管理者及び従業員

- ① 当該農場では、鶏舎の飼養管理は場長を含む従業員5人で行っており、各従業員は基本的には担当鶏舎が決まっているとのこと。
- ② 系列の肉用鶏農場が周辺に2農場あるが、従業員は各農場に専属である。なお、発生農場の従業員が手伝い等のため他の農場を訪問することもあるが、その場合は、自宅から直行・直帰し、1日で複数農場を訪問することはないとのこと。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 衛生管理区域は、公道を挟んで2つに区分されている。事務所がある方の区域の入口には、車両消毒用の動力噴霧器、訪問者用の長靴、運転席フロアマット、来場者記録簿が備えられていたが、反対側の区域の入口には同様のものはなく、事務所側の区域から入場した後は、公道を挟んだ2区域を自由に往来していたとのこと。
- ② 飼料業者、ガス会社等の外部訪問者が入場する場合は、区域入口で、ドライバー自ら動力噴霧器でタイヤ回りを消毒し、長靴の交換、防護服の着用を行う。また、手指消毒を実施し、来場者記録簿に記入した上で、作業を開始するとのこと。
- ③ 従業員は、出勤時、衛生管理区域外の駐車場に駐車してから、衛生管理区域の入口近くの事務所に、靴底消毒を行った上で入室する。事務所内で、農場内長靴への交換、作業着への更衣、手指消毒を行う。
- ④ 従業員が各鶏舎に入る際には、各鶏舎専用の長靴に交換し、靴底消毒及び手指消毒を行った上で、各鶏舎専用の防護服を着用する。
- ⑤ 各鶏舎の周囲には定期的に消石灰を散布しており、調査時も幅約1mの石灰帯が確認できた。

- ⑥ 鶏舎横の飼料タンク上部には蓋が設置されており、タンク内への野鳥等の侵入やタンク内の飼料への野鳥の糞等の混入の可能性は低いと考えられた。
- ⑦ 飼養管理者によると、飼養鶏への給与水は井戸水を利用しており、塩素消毒を実施していたとのこと。
- ⑧ 飼養管理者によると、鶏は鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後に鶏舎の洗浄と消毒を行っていたとのこと。
- ⑨ 鶏糞はオールアウト後に鶏舎内で山状に堆積させ、約1カ月の空舎期間中に発酵させ、次の導入鶏の敷料として再利用するとのこと。また、余剰の鶏糞は、離れた場所にある堆肥舎に保管するために移送し、有料で業者に引き取ってもらっていたとのこと。
- ⑩ 発生農場の直近の鶏糞搬出は約3カ月前であった。なお、堆肥舎には防鳥ネットは敷設されていない。
- ⑪ 飼養管理者によると、毎日2回の健康観察時に回収した死亡鶏は、農場内の焼却炉で焼却しているとのこと。
- ⑫ 系列農場間で作業車両を共用しているが、移動前に洗浄・消毒を実施している。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 調査時は、農場敷地内で野鳥は見かけなかったが、飼養管理者によれば、カラス、ハト、スズメ等は日常的によく見かけるとのこと。また、時々ネコを場内で目撃することがあるとのこと。
- ② 飼養管理者によると、鶏舎内で頻繁にネズミを見かけることはないが、ネズミ対策として自ら殺鼠剤を設置しているとのこと。調査時、発生鶏舎において、ネズミ類のものと思われる糞や足跡を確認した。
- ③ 鶏舎の側面は金網とカーテンによって外界と隔てられていたが、金網に破損は認められなかった。側面及び奥側のカーテンは、外気温の変化に応じて、手動で上げ下げしていたとのこと。
- ④ 鶏舎側面下部には、オールアウト時の洗浄・消毒作業で発生する汚水を舎外に排水するための長方形の穴が複数開いていた。この穴はコンクリートブロックで塞がれていたが、このうち、鶏舎入口付近の敷料がない区画にある左右1カ所ずつの穴には、小型哺乳類が侵入可能な隙間が確認された。